

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター

執筆担当：斎藤登美夫

◆◆◆ No.0786 ◆◆◆

24/04/24

【 支持率低迷の岸田内閣、「不思議な延命」続く可能性も 】

同じような話を何度もしている気がするが、岸田内閣の支持率が低迷、危機的な状況にある。一部からは「卒業旅行」などと揶揄された国賓待遇の訪米も終了し、いよいよ辞任待ったなしかと思いきや、どうやらそうでもないらしい。周知のように、今週末 28 日には衆院トリプル補欠選挙が実施され、「自民党が 3 敗なら政局、岸田降ろしの動きが強まる」との見方が依然として有力ながら、「如何せん対抗馬がない」とされ、過去に例がない「不思議な延命」が続く可能性も取り沙汰されているようだ。

◎有力対抗馬不在、補選 3 連敗でも「岸田降ろし」盛り上がりず!?

岸田首相の首相在任日数は、昨 23 日で 933 日を数える。これで橋本龍太郎氏の同 932 日を抜いたことになり、戦後 8 位という好記録だ。しかし、決して平穏な道のりだったわけではなく、むしろ茨の道を突き進んでいる感があり、そしてそれはいままも続いている。強い逆風が吹くなかでの首相在任記録の更新になる。

その最たるものは、なんといっても内閣支持率の低迷だろう。ともに今月 20-21 日に調査を行ったとされる、政権に批判的な朝日新聞と毎日新聞の結果を見ると、前者は 26%で後者は 22%だった。ともに、約 1 カ月前に行った調査からは 4-5 ポイントほど支持率が上がっているが、これはある程度予想されたもの。たとえば、知人である全国紙政治部記者は以前から「首相の訪米後は支持率が上昇する傾向にある」と指摘していたが、まさにそれが具現化されたものと言えよう。ただし、根本的な流れそのものに変化はないようだ。

いずれにしても、4 月の内閣支持率が上昇したとはいえ、20%台という極めて悲惨な結果であることは間違いない。以前にも取り上げた「青木の法則（内閣支持率と自民党支持率を足し合わせた数字が「50」を下回ると政権運営が困難になる）」に引っ掛かる段階へ、すでに陥っていることからすれば、本来いつ「岸田降ろし」の風が吹き、「政局」になっても決して不思議はないのだが、驚くべきことにむしろ現在でも「無風」に近い状況だ。

そうしたなか、今週末 28 日に 3 つの補選が実施されるが、うち東京 15 区と長崎 3 区の 2 つは候補者を擁立せずに、自民党の「不戦敗」が確定。残りのひとつ、島根 1 区も与野党一騎打ちの様相が呈するなか、苦戦が囁かれている。

したがって、最悪のケースとして「自民党 3 連敗」の可能性もある否定できず、その場合には有無を言わずに「当然政局」といった見方が以前までは声高に聞かれていたものの、ここ最近になりそうした声も少しずつ萎みつつある感を否めない。いったい何故なのだろうか。

一番大きな理由は、再三再四指摘している「対抗馬の不在」。これには安倍派をはじめとする、自民党派閥の解散が大きいとされ、以前のような「派閥の代表」を選出しにくい点が挙げられている。また、有力候補に名前の挙がっていた塩谷立元文部科学相は離党、参院側トップの世耕弘成前党参院幹事長にも「離党勧告」が出されるなど、正直総裁選どころではない。これは、世論調査において一部から抜群の人気を誇った河野太郎デジタル担当相などについても同様だ。

逆に「派閥の解消」は無所属の青山繁晴参議院議員や、高市早苗経済安全保障担当相にとって追い風になり、「推薦人の 20 人を集めることはたぶん出来るので、総裁選への出馬そのものはおそらく可能。しかし問題はその後。最終的に勝利を収められるか」という疑問は残る」（全国紙政治部記者）と言わざるを得ない。消極法であるものの、結果的に岸田氏しかいないという判断になるか…。

いずれにしても、仮に今週末の「補選 3 連敗」でも岸田首相が結果として延命されることになるとすれば、問題なのは「自民党の顔を変えない」で次の選挙、おそらく秋までには行われであろう衆院選に勝てるのか—ということになる。

しかし、ある政治評論家によると、「岸田氏はもちろん次の選挙で勝てるとは思っていない。しかし、野党の体たらくもあり、政権の座から自民党が滑り落ち下野するとも考えていない」という。つまり、衆院選後は

